

# 多変量解析を用いた万葉短歌の書式分類について

— 『柿本人麻呂歌集』 論として —

村田 右富実  
川野 秀一

## 一 はじめに

人麻呂歌集の書式が、その呼称は別にして二分類できるところについては、次に簡略に示したように、多くの先行研究が積み重ねられている。<sup>1)</sup>

- ① 契沖『万葉代匠記 精選本』（一六九〇年頃『全集』第一卷）……簡古ニカカレタリ
- ② 賀茂真淵『人麻呂歌集』（一八三五年『全集』第二卷）……常体／詩体
- ③ 神田秀夫氏『柿本人麻呂歌集と柿本人麻呂伝』（塙書房一九六五）……机上体・啓上体／馬上体・枕上体

- ④ 渡瀬昌忠氏『柿本人麻呂研究 歌集編 上』（おうふう一九七三）……非略体／略体
  - ⑤ 伊藤博氏『万葉集の表現と方法 上』（塙書房一九七五）……常体／詩体
  - ⑥ 稲岡耕二氏『万葉表記論』（塙書房一九七六）……非略体／略体
  - ⑦ 阿蘇瑞枝氏『柿本人麻呂論考』（おうふう一九八一）……非略体／略体
  - ⑧ 稲岡耕二氏『柿本人麻呂の表現世界』（岩波書店一九九二）……新体／古体
- その考え方は、『万葉集』の中に『柿本人麻呂歌集』という

世界を設定し、その内部論理を議論することに他ならなかった。この内部論理を、可能な限り客観的に記述するため、たとえば⑦阿蘇著は、一首あたりの文字数について「16字未満の部分を略体歌とし、16字以上の部分を非略体歌として区別してみる」というラインを引いた。その上で、例外となる歌々を一首一首を考察し、現在の通称ともいえる用語を提唱した。そして、よく知られているように⑥稲岡著はこの阿蘇著の二分類を基本的に継承しつつ、二種の書式を通時的に把握し、⑧稲岡著に至り、古体歌／新体歌という新しい名称を与えた。しかし、二十世紀の終わり頃から、いわゆる歌木簡と呼ばれる七世紀の木簡が相次いで発見されるにおよび、二種類の書式の通時把握は批判に曝されることになった。その批判は人麻呂歌集歌の書記者を人麻呂と考えてよいかどうかという疑問にまで発展する一方、屋名池誠氏「人麻呂歌集の表記機構」(『慶應大学藝文研究』一〇九巻一号／二〇一五年十二月)が、人麻呂歌集歌の二つの類型を、漢字を用いた日本語書記として不足のないことを述べるに至り、人麻呂歌集歌の研究は、一回りした感がある。

そこで、あらためて阿蘇著や稲岡著の二分類の妥当性から問い直してみたい。というのも、二著の分類の結論はほとんど変わらないものの、それはあくまでも『万葉集』の中の「人麻呂

歌集』という枠組みの中でのみ論理化されたものであり、『万葉集』の書式全体への眼差しを持っていないためである。もっとも、それは当時の研究状況に鑑みれば、やむを得ないことであつた。一首あたりの文字の総数で議論を組み立てるのも、手作業ということを考慮すれば、当然のことであつた。しかし、現在、テキストファイルが存在し、万葉集全体の文字数などはすぐに計算可能な状況にある以上、人麻呂歌集歌だけではなく、万葉歌全体の書式について考えるべきであろうし、一首あたりの総文字数から議論することも控えるべきだろう。たとえば、

- ① 橡 解濯衣之 恠 殊欲服 此暮可聞 (7・一三一四13)  
 ② 妹當 茂莉音 夕霧 来鳴而過去 及乏 (9・一七〇二14)  
 ③ 妻隱 矢野神山 露霜尔 尔賈比始 散卷惜 (10・二一七八16)

- ④ 山菅 乱戀耳 令為乍 不相妹鳴 年経乍 (11・二四七四15)

の四首を略体、非略体に分類しようとする、よほど読み慣れた研究者(観察者)でなければ無理なのではないか。あるいは、その研究者にとって既知情報であるため、「これは略体、これは非略体」と判別できるのではないだろうか。さらにいえば、①は人麻呂歌集歌ではない。しかし、文字数だけでいえば、略

体歌に極めて近い。そして、②は「いもがあたり」「ゆふぎりに」

③は「やののかむやま」「にほひそめたり」「ちらまくをしも」

④は「やますげの」が無表記であり、④は「みだれこひのみ」「せ

しめつつ」「あはぬいもかも」「としはへにつつ」が表記され

ている。これらをどう把握するのか。阿蘇・稲岡著の分類によ

れば、②③は非略体歌、④は略体歌である。一首一首個別に見

て行くと、こうした不整合ともいえるような状況が発生してし

まっている。その一方で、略体歌・非略体歌の区別を前提にし

て、議論は、一首をどう理解するか。一文字をどう理解するか

というレベルにまで突き進んでしまった。

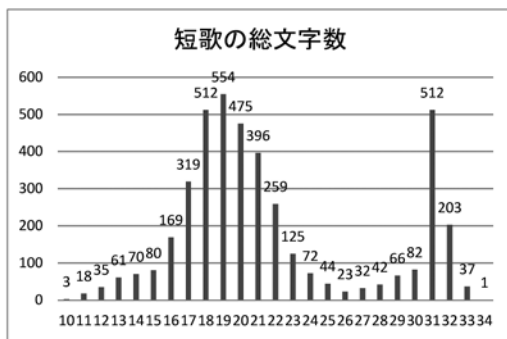
そこで本稿では、次の二つの考え方に基<sup>つ</sup>いて、論を進めた

い。

①『万葉集』の中の『柿本人麻呂歌集』の書式ではなく、『万葉集』全体から考える。

②客観的な基準に基づいて、分類した上で、その意味を考

## 二 データ化



『万葉集』に載る、五七五七七の全てが記されており、かつ難訓箇所のない短歌は四一九〇首存在する。<sup>(4)</sup> その短歌の一首あたりの文字数をグラフ化すると上の通り。

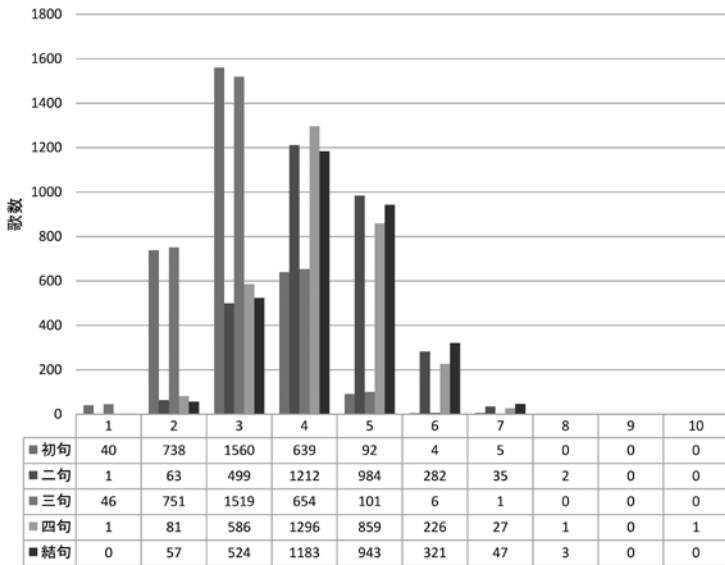
いうまでもなく、三十一字にピークがある一群はいわゆる一字一音表記タイプの歌々であり、十八〜二十字にピークを持つ群は訓字主体表記タイプの歌々である。二六〜七字の歌々をどちらのグループに入れるかは研究者によって分かれることになるだろうが、大きく二つのグループに分類すること自体に異論はあるまい。本稿で用いた多変量解析を用いて万葉短歌を二グループに分類させても、同様の結果が得られる。

また、十五字と十六字とは倍以上歌数が違う。手作業の文字カウントでここにラインを設けた阿蘇・稲岡両著にはあらためて敬意を表したい。しかし、現在の水準から見ると、残念ながら大雑把に過ぎるといわざるを得ない。下のグラフは、訓字主体表記タイプの歌が中心の巻（一～四、六～十三、十六～以下、訓字主体表記歌巻と記す<sup>⑤</sup>）の各句毎の文字数をグラフ化したものである。

当然ではあるが、初句と三句、二句と四句と結句が似たような結果になる。裏返していえば、初・三句のグループと、二・四・結句のグループとは、同じ三文字からなる句であつても、その三文字の持つ意味が違っていることになる（初・三句のグループでは全体の五〇%を占めるも<sup>⑥</sup>とも一般的な文字数であるのに対し、二・四・結句グループでは全体の約十七%しかない文字数である）。やはり、それぞれの句の文字数を考慮せず一首全体の文字数だけで論を進めるのは、問題だろう。そこで、本稿では、歌全体の文字数ではなく、各句毎の文字数をもとにあらためて分類を試みる。

また、人麻呂歌集歌の分類は文字数だけではなく、助詞、助動詞の表記が用いられることから、助詞助動詞の文字数もデータ化して加えた。次の表は、そのデータの一部である。

巻一～四、六～十三、十六の一句あたりの文字数一覧



来可視 人毛不有尔 吾家有 梅之早花 落十方吉(10・二二二八)

2328	
3	M_1
5	M_2
3	M_3
4	M_4
4	M_5
0	J_1
1	J_2
0	J_3
1	J_4
2	J_5
1	JD_1
0	JD_2
1	JD_3
0	JD_4
0	JD_5

凡例

≦ 文字数

┘ 助詞の文字数

㊦ 助動詞の文字数

数字 句番号

年切 及世定 恃 公依 事繁(11・二三九八)

2398	
2	M_1
3	M_2
1	M_3
2	M_4
2	M_5
0	J_1
1	J_2
0	J_3
0	J_4
0	J_5
0	JD_1
0	JD_2
0	JD_3
0	JD_4
0	JD_5

宇知比左須 美也古乃比等尔 都氣麻久波 美之比乃其等久

安里等都氣已曾(20・四四七三)

4473	
5	M_1
7	M_2
5	M_3
7	M_4
7	M_5
0	J_1
2	J_2
1	J_3
1	J_4
3	J_5
0	JD_1
0	JD_2
0	JD_3
4	JD_4
0	JD_5

ただし、これまでの研究では音仮名の助詞を中心に考えていたが、「矣」(を)、「香」(か)といった文字を仮名と考えることとの妥当性が問われるようになり、逆に「者」(は)、「之」(が)の

といった文字を単なる訓字とと考えてよいかも疑問である。こうした点から、音仮名、訓字の区別は一度棚上げにすべきではないかと考える。そのため、助詞や助動詞がそれぞれの句に文字として何文字存在しているかをカウントすることにした。ただし、打ち消しの助動詞については、これがないと意味が反転してしまうため、除外している。

次ページの表は、実際に解析に使用したデータの冒頭部である。以下、このデータをもとに、三分類した時、何が見えてくるかについて、述べてゆく。

### 三 解析方法

本稿では、いわゆるクラスター分析の一種である、混合正規分布によるクラスター分析を用いている。一般に知られているクラスター分析は結果をデンドログラム(樹形図)で示し、房の状況を目視して議論するが、混合正規分布によるクラスター分析は、あらかじめ分類のグループ数を指定する手法である。このデータを二グループに分類すると、一字一音表記タイプと訓字主体表記タイプに分類される点は先に述べたとおりである。また、四グループに分類した場合については後述する。

歌	M1	M2	M3	M4	M5	J1	J2	J3	J4	J5	JD1	JD2	JD3	JD4	JD5
4	3	5	3	6	4	0	2	1	0	0	0	0	0	2	0
6	3	5	4	4	5	1	1	0	1	1	0	0	0	1	1
7	3	4	5	6	6	1	0	0	1	1	0	0	1	0	0
8	4	5	3	6	6	1	1	1	1	2	0	1	0	1	0
10	4	6	3	5	5	2	2	0	2	1	0	0	0	0	1
11	4	5	3	4	4	1	0	1	1	2	0	0	0	0	0
12	3	6	3	6	4	0	1	0	1	1	1	1	0	0	0
14	3	4	3	5	6	1	1	0	1	0	0	0	1	1	0
15	4	4	5	5	4	1	1	0	1	2	0	0	1	0	0
18	4	4	3	4	7	1	2	2	2	1	0	0	0	0	2
19	4	3	4	4	7	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0
20	3	5	3	6	5	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0
21	3	6	5	4	5	1	1	1	1	2	0	0	0	0	1
22	3	5	4	5	5	1	1	0	3	1	0	0	0	0	1
23	3	3	5	7	5	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0
24	3	4	4	6	4	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0
27	3	5	4	5	5	1	2	1	0	0	0	0	1	0	0
28	3	4	3	3	5	1	0	1	0	0	0	2	0	1	0
30	3	5	3	4	5	1	1	1	1	0	0	0	0	0	1

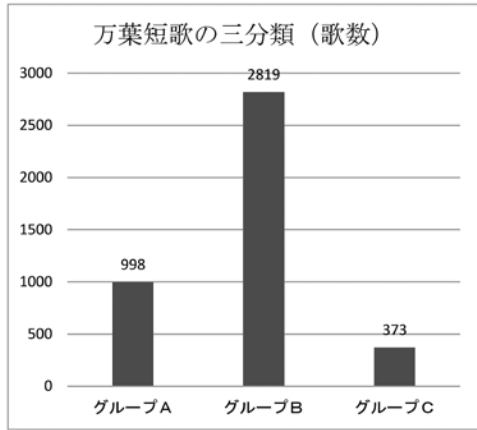
さて、三グループに分類するということは、特定のグループに分類される可能性が三三・三%（以下、この各グループに分類される可能性を帰属率と記す）よりも高ければ、そのグループに分類されることが許容されるということである（四分類だ

と二五%より高ければ許容されることになる）。たとえば、データ⑦の各グループへの帰属率が、グループA≒三四%、グループB≒三三%、グループC≒三三%ならば、データ⑦はグループAに分類される。また、データ④のそれが、グループA≒六〇%、グループB≒四〇%、グループC≒〇%ならばグループAに分類される。グループBへの帰属率だけを見れば、データ④の方が高くなる。また、当然ではあるが、データ④の方が、帰属性の精度は高い。このように実際の分析結果の判断には、個別データの帰属率が重要であり、本稿では、単なる分類結果だけで論を進めず、帰属率が九〇%以上（他のグループへの帰属率の合計が一〇%未満）のデータを用いることとした。

さらに、例えば三分類の分析結果において、データ⑦のようなデータばかりのグループであれば、そのグループは良質なグループとはいえない。そもそも同じようなデータばかりを無理に分類しようとする、品質の低いグループができてしまう。本稿ではこの点にも気を配りながら論を進める。

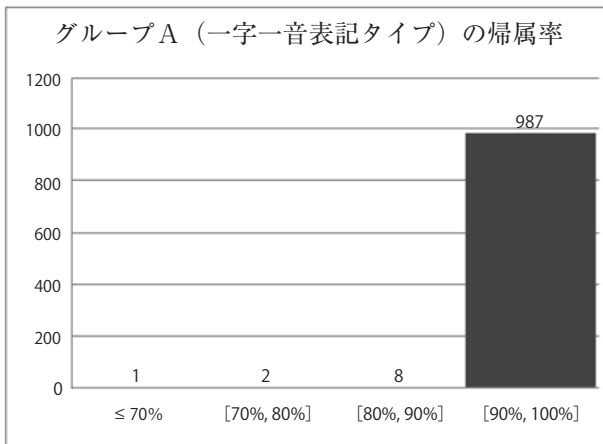
#### 四 解析結果

解析結果は次の通り。



- グループA  
→一字一音表記タイプのグループ。
- グループB  
→非略体歌タイプの訓字主体表記歌のグループ。
- グループC  
→略体歌のタイプの訓字主体表記歌のグループ。

それぞれのクラスター内の歌を見ると、グループAには、一字一音表記タイプの歌々ばかりが含まれており、グループBには訓字主体表記の中でも非略体歌タイプの歌々が集まり、グループCには略体歌タイプの歌々が存在している。万葉短歌はその書式によって一字一音表記タイプ（グループA）、非略体歌タイプ（グループB）、略体歌タイプ（グループC）に分類してよいことがあらためて確かめられたといつてよいだろう。以下、分析結果を個別に見て行く。



グループA (一字一音表記タイプ) に分類された九九八首中、帰属率が九〇%以上の歌は九八七首 (九八・〇%) にのぼる。グループAは、極めて良質な集合体である。

## 五 グループA (一字一音表記タイプ) について

また、グループA中、最も帰属率の低い歌（六九％）は、

保登等藝須 奈尔乃情曾 多知花乃 多麻奴久月之 来鳴

登餘牟流（17・三九一二）

である（グループBの帰属率は三一％、グループCの帰属率は〇％）。この程度の偏りであれば、データ全体を用いて論を進めても構わないが、先に述べたように、論の精度を保持するために、今は帰属率九〇％以上の歌々に限定して論じる。

帰属率九〇％以上の九八七首のうち、九六三首が一字一音表

記歌巻に集中する。それ以外の二四首の内訳は以下の通り。

卷一↓1首

嗚呼見乃浦尔 船乗為良武 憾婦等之 珠裳乃須十二

四寶三都良武香（1・四〇29）

卷二↓1首

妻毛有者 採而多宜麻之 作美乃山 野上乃宇波疑 過

去計良受也（2・二二一26）

卷四↓1首

神左夫跡 不欲者不有 八多也八多 如是為而後二 佐

夫之家牟可聞（4・七六二27）

卷八↓1首

多夫手二毛 投越都倍吉 天漢 敝太而礼婆可母 安

麻多須辨奈吉（8・一五二二26）

卷九↓1首

於久礼居而 吾者哉將戀 稻見野乃 秋芽子見都津 去

奈武子故尔（9・一七七二26）

卷十二↓1首

垂乳根之 母我養蚕乃 眉隱 馬聲蜂音石花蜘蛛荒鹿

異母二不相而（12・二九九一27）

卷十六↓2首

荒城田乃 子師田乃稻乎 倉尔舉臈而 阿奈干稻干稻志

吾戀良久者（16・三八四八27）

心乎之 無何有乃郷尔 置而有者 藐孤射能山乎 見末

久知香谿務（16・三八五一26）

卷十九↓十六首

矢形尾乃 麻之路能鷹乎 屋戸尔須惠 可伎奈泥見都追

飼久之余志毛（19・四一五五28）

白玉之 見我保之君乎 不見久尔 夷尔之乎礼婆 伊家

流等毛奈之（19・四一七〇26）

月立之 日欲里乎伎都追 敲自努比 麻泥騰伎奈可奴

霍公鳥可母（19・四一九六26）

都礼母奈久 可礼尔之毛能登 人者雖云 不相日麻祢美



念曾吾為流 (19・四一九八27)

敷治奈美乃 志氣里波須疑奴 安志比紀乃 夜麻保登等

藝須 奈騰可伎奈賀奴 (19・四二一〇31)

可久婆可里 古非之久志安良婆 末蘇可我美 弥奴比等

吉奈久 安良麻之母能乎 (19・四二二32)

許能之具礼 伊多久奈布里曾 和藝毛故尔 美勢牟我多

米尔 母美知等里氏牟 (19・四二二31)

安乎尔与之 奈良比等美牟登 和我世故我 之米家牟毛

美知 都知尔於知米也毛 (19・四二二三32)

有都々毛 御見多麻波牟曾 大殿乃 此母等保里能 雪

奈布美曾祢 (19・四二二八26)

天雲乎 富吕尔布美安太之 鳴神毛 今日尔益而 可之

古家米也母 (19・四二三五26)

韓國尔 由伎多良波之氏 可敞里許牟 麻須良多家乎尔

美伎多弓麻都流 (19・四二六二29)

梳毛見自 屋中毛波可自 久左麻久良 多婢由久伎美乎

伊波布等毛比氏 (19・四二六三29)

足日木乃 夜麻之多日影 可豆良家流 宇倍尔也左良尔

梅乎之努波牟 (19・四二七八28)

青柳乃 保都枝与治等理 可豆良久波 君之屋戸尔之

千年保久等曾 (19・四二二八九27)

和我屋度能 伊佐左村竹 布久風能 於等能可蘇氣伎

許能由布敞可母 (19・四二九一28)

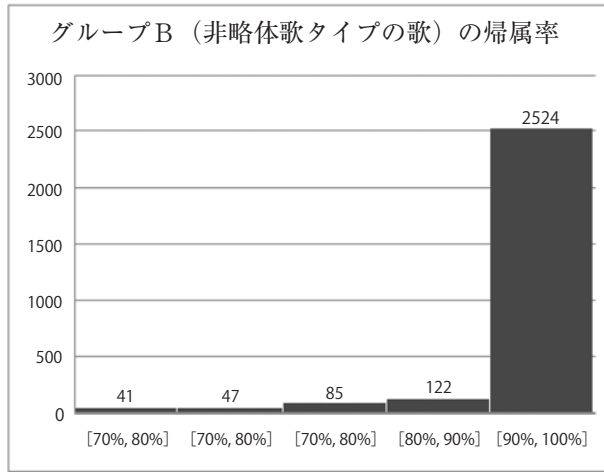
宇良宇良尔 照流春日尔 比婆理安我里 情悲毛 比登

里志於母倍婆 (19・四二九二27)

訓字主体表記歌巻と仮名書き歌巻の中間的な存在といわれる巻十九の十六首を除くと、わずか八首が残るに過ぎない。この八首には一音節の文字が多用される傾向にあり、戯書と相俟って文字数が多くなっている歌が目立つ。たとえば、1・四〇番歌であれば、よくいわれるように数字使用のために文字数が増えていることが理解できるし、12・二九九一番歌は第四句の有名な戯書が影響していることはいうまでもない。他にも、個別論的にグループAへの帰属理由を述べることの可能な歌はあろうが、今は、グループAが万葉短歌の書式の一つの方法であったことを再確認するに留め置く。

## 六 グループB (非略体歌タイプ) について

グループBの解析結果は次の通り。



グループBは非略体歌タイプの歌の集合である。二八一九首がグループBを構成しており、万葉短歌の最も一般的な書式と違って間違いない。グループA同様、帰属率が最低の歌を見ると、

天漢 八十瀬霧合 男星之 時待船 今滂良之(10・

二〇五三)

が検出されている(帰属率は、グループA $\equiv$ 0%、グループB $\equiv$ 五〇・三三%、グループC $\equiv$ 四九・六六%)。この歌は、グループB(非略体歌タイプの歌)と判断することも、グループC(略体歌タイプの歌)ということも避けるべきである。

また、こちらもグループA同様、帰属率九〇%以上の歌々(二五二四首)を見ると、グループB全体の八九・五%にのぼる。グループBもグループA同様、高い同種性を保っている。

帰属率九〇%以上の歌々に含まれる仮名書き歌巻の歌は次の八首。

#### 巻五

奈具佐牟留 心波奈之尔 雲隠 鳴往鳥乃 祢能尾志奈

可由(5・八九八23)

麗妙能 布衣遠随尔 伎世難尔 可久夜歎敢 世牟周弊

遠奈美(5・九〇一24)

水沫奈須 微命母 栲繩能 千尋尔母何等 慕久良志都

(5・九〇二21)

巻十四↓なし

巻十五↓なし

巻十七

多奈波多之 船乘須良之 麻蘇鏡 吉欲伎月夜尔 雲起

和多流 (17・三九〇・24)

鶉鳴 布流之登比等波 於毛敵礼騰 花橋乃 尔保敷許

乃屋度 (17・三九二・24)

新年乃波自米尔 豊乃登之 思流須登奈良思 雪能敷

礼流波 (17・三九二・24)

卷十八

櫻花 今曾盛等 雖人云 我佐不之毛 支美止之不里者

(18・四〇七・21)

卷二十

新年乃始乃 波都波流能 家布敷流由伎能 伊夜之家

餘其騰 (20・四五一・24)

明らかに二音節以上の訓字が混じっていることがわかる。そして、巻五の三首は、いわゆる巻五・後半部の憶良歌であり、巻十八の一首は補修部といわれる部分に属している。どちらも一字一音表記タイプの歌とはいえない。また、17・三二九五番歌と20・四五一六番歌は「あらたしき としのはじめ」を共有しており、次に掲げるように「としのはじめ」を一字一音で記した歌はない。

新 あらたしき としのはじめ 年之初者 いや年に 雪踏み平し 常かくにも  
が (19・四二二・9)

降る雪を 腰になづみて 参り来し 験もあるか としの

初 はじめに 尔 (19・四二三・0)

新 あらたしき としのはじめに 年始尔 思ふどち い群れて居れば 嬉しくも

あるか (19・四二八・四)

新 あらたしき としのはじめに 年始邇 かくしこそ 仕へまつらめ 万代まで

に (『続日本紀』一)

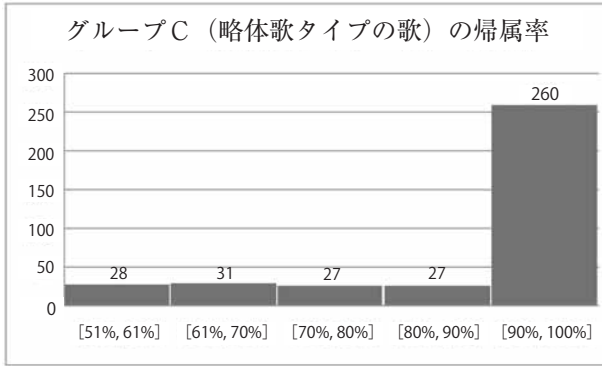
「新年(之)(始初)」という文字列は表記上の定型とさえいえそうである。高い類型性に支えられた訓字主体表記と考えてよいだろう。

そして、残る二首についていえば、一字一音表記歌巻にあって比較的訓字が多い巻十七の中で、偶然訓字が多くなった可能性が高いように思われるが、今は例外として処理しておく。ちなみに帰属率九〇%以上の巻十九の歌は九五首にのぼる。巻十九が仮名書きの歌と非略体歌的な歌が入り交じっていることもこの計算結果からもよくわかる。今回分析の対象とした母集団に対し、混合正規分布によるクラスター分析は良好に機能しているといつてよい。

以上、グループAとグループBを見てきた。では、もう一つの分類であるグループCはどのような特徴を持っているのだろうか。

## 七 グループC（略体歌タイプ）について

グループCの解析結果は次の通り。



グループCに属する歌は三七三首。うち、帰属率が最も低い歌は、福麻呂歌集歌の、

立易 月重而 雖不遇 核不可忘 面影思天（9・一七九四）である（帰属率は、グループAⅡ〇%、グループBⅡ四九・二二%、グループCⅡ五〇・七八%）。先の10・二〇五三番歌同様、論理の外に置くべきだろう。また、グループCはグループA Bに比べると同種性が低いように見えるが（九〇%以上の帰属率の歌が二六〇／三七三＝六九・七%）、グループA Bが高すぎるというのが実情であり、グループCも十分良質なグループといつてよい。グループCの帰属率九〇%以上の歌は次表の通り。

作者等	歌数
略体歌	192
作者不記載歌	40
非略体歌	18
人麻呂作歌	3
福麻呂歌集歌	1
大伴家持	1
古歌集	1
沙弥	1
不審作者	1
作者未詳	1
常陸娘子	1
総計	260

当然ではあるが、略体歌が多数を占める。略体歌は全一九五首なので、実に略体歌の九八・五%が、帰属率九〇%以上でグループCに分類されていることになる。残る三首もグループCに分類されており、その帰属率は以下の通り。

玉梓 道不行為有者 惻隱 此有戀 不相 (11・二三九三  
15↓八九%)

菅根之 惻隱 照日 乾哉吾袖 於妹不相為 (12・二八五  
七16↓七十二%)

山菅 乱戀耳 令為乍 不相妹鴨 年経乍 (11・二四七四  
15↓六五%)

今は、帰属率九〇%以上で論を進めているため、この三首は論の対象から外れてしまうが、これまでなされてきた略体歌の判定は極めて客観性の高いものであったといつてよい。

しかし、この解析結果は、略体歌タイプの書式が、『柿本人麻呂歌集』にのみ見られるものではないことをも示している。グループA Bに比べると少数派ではあるものの、グループCの歌々は万葉短歌の代表的な書式といつてよい。『柿本人麻呂歌集』の書記者を一人と仮定すれば、その人物にとってグループB (非略体歌タイプ) の書式とグループC (略体歌タイプ) の書式とは、その人物の前に選択的に存在していたことになろう。『柿本人麻呂歌集』の短歌・全三四五首の内訳が、グループA 〓〇首、グループB 〓一二五首 (九〇%以上) 〓九一首、グループC 〓二三〇首 (九〇%以上) 〓二一〇首) であるところを見ると、その人物は、グループA (二字一音表記タイプ) を選ぶこ

となく、万葉短歌の一般的な書式であるグループB (非略体歌タイプ) よりも、万葉短歌全体から見ると少数派のグループC (略体歌タイプ) の書式を採用する傾向にあったことになる。その選択基準が何であるかは個別の歌の解釈や文字の使用状況から類推するよりないものの、存外、これまでの研究史の蓄積が示しているとおり、グループC (略体歌タイプ) の歌々には既存の歌が多く、グループB (非略体歌タイプ) の歌々には創作歌が多いように思われる。<sup>9)</sup>

なお、『柿本人麻呂歌集』の書記者が複数であった場合、この二つのグループが書記者の別を表しているか否か、不明である。というよりも複数であるという仮定を立てた場合、最大で三四五人の書記者を想定しなければならず、その論理化は不可能だろう。

また、九〇%以上の帰属率を持つグループC (略体歌タイプ) に非略体歌が十八首含まれている点も、大きな特徴である。十八首の内訳は以下の通り。

- ①今造 斑衣服 面影 吾尔所念 未服友 (7・一二九六  
14)
- ②常之倍尔 夏冬往哉 裘 扇不放 山住人 (9・二六八二  
15 「獻忍壁皇子歌」)

- ③金風 山吹瀬乃 響苗 天雲翔 鴈相鳴（9・二七〇〇）  
 14 「宇治河作歌」
- ④妹當 茂莉音 夕霧 来鳴而過去 及乏（9・二七〇二）  
 14 「獻弓削皇子歌」
- ⑤雲隱 鴈鳴時 秋山 黄葉片待 時者雖過（9・二七〇三）  
 15 「獻弓削皇子歌」
- ⑥黒玉 夜霧立 衣手 高屋於 霏霰麻天尔（9・二七〇六）  
 15 「舍人皇子御歌」
- ⑦久方之 天芳山 此夕 霞霏霏 春立下（10・一八二二）  
 14
- ⑧朱羅引 色妙子 數見者 人妻故 吾可戀奴（10・一九九九）  
 「七夕」
- ⑨吾等戀 丹穂面 今夕母可 天漢原 石枕卷（10・二〇三六）  
 「七夕」
- ⑩黒玉 宵霧隱 遠軀 妹傳 速告与（10・二〇〇八）  
 「七夕」
- ⑪天漢 水陰草 金風 靡見者 時来々（10・二〇一三）  
 「七夕」
- ⑫君不相 久時 織服 白袴衣 垢附麻弓尔（10・二〇二八）  
 「七夕」

- ⑬天漢 梶音聞 孫星 与織女 今夕相霜（10・二〇二九）  
 14 「七夕」
- ⑭秋去者 川霧立 天川 河向居而 戀夜多（10・二〇三〇）  
 15 「七夕」
- ⑮妻隱 矢野神山 露霜尔 尔寶比始 散卷惜（10・二一七八）  
 七七八
- ⑯朝露尔 染始 秋山尔 鍾礼莫零 在渡金（10・二二七九）  
 15
- ⑰我袖尔 電手走 卷隱 不消有 妹為見（10・二三二二）  
 14
- ⑱我故 所云妹 高山 岑朝霧 過兼鴨（11・二四五五）  
 13
- この十八首は、グループCの人麻呂歌集歌内において、次表のように分布する。

十八首の分布	グループC	巻
1	21	七
5	5	九
11	28	十
1	131	十一
0	25	十二
18	210	計

九〇%以上帰属率でグループCに含まれる非略体歌は、明らかに巻九と巻十に偏在する。そして、巻十の十一首中七首は七

夕歌である。巻九の歌にせよ、巻十の七夕歌にせよ、これらは研究史において積極的に人麻呂の自作とされて来た歌々である。これまでの研究史は、「非略体歌は人麻呂の自作であり、略体歌にはそうではない歌が多数含まれている」という考え方を醸成して来た。しかし、それがいつのまにか、「人麻呂の自作は非略体歌であり、人麻呂の自作ではない歌の多くは略体歌である」と変化したのではあるまいか。そのため、巻九の歌々や巻十の七夕歌は「人麻呂自作だから非略体歌である」という認定を受けているように思われる。

さらに、他の歌々も特徴的に分布する。

- ① 7・二二九六↓巻七譬喩歌の冒頭歌
- ⑦ 10・一八一二↓巻十春雑歌の冒頭歌
- ⑮ 10・二二七八↓巻十秋雑歌中、最大歌群である「詠黄葉」の冒頭の二首の第一首
- ⑯ 10・二二七九↓⑮の次歌。巻十秋雑歌中、最大歌群である「詠黄葉」の冒頭の二首の第二首
- ⑰ 10・二三一二↓巻十冬雑歌の冒頭歌
- 明らかに冒頭歌が多い。巻九は一首のみでまとまる歌も多いため略すとして、巻七、十、十一、十二の中で、人麻呂歌集歌が歌群や部立の冒頭に立つ例を一覧すると次の通り。

巻七		
Group	題詞等	歌番号
B'	詠天	1068
B	詠雲	1087
B	詠山	1092
B	詠河	1100
B	詠葉	1118
B'	行路	1271
C	寄衣	1296
C	寄玉	1299
C	寄木	1304
C	寄花	1306
C	寄川	1307
C	寄海	1308

巻十一		
Group	題詞等	歌番号
B'	正述心緒	2368
B'	寄物陳思	2415
B	問答	2508

巻十二		
Group	題詞等	歌番号
C	正述心緒	2841
C	寄物陳思	2851
C	羈旅発思	3127

\*表中の「B'」は帰属率 90% 未満のグループBを示す。

巻十		
Group	題詞等	歌番号
C	春雑歌	1012
C	春相聞	1890
B	秋雑歌（七夕）	1996
B	詠花	2094
C	詠黄葉	2178
C	詠雨	2234
C	秋相聞	2239
C	冬雑歌	2312
C	冬相聞	2333

巻七の雑歌部と巻十一とはグループB（非略体歌グループ）の歌が冒頭歌になりやすく、巻七の譬喩歌部と巻十二とは、グループC（略体歌グループ）の歌が冒頭歌に立ちやすい傾向を見る事ができる。ただし、この現象は、単にグループBとグループCとを歌の内容に合わせて大雑把に分類した結果かもしれないし、『万葉集』の編纂の側の問題に吸収されるかもしれ

ない。また、歌群の冒頭にグループC（略体歌タイプ）の歌が配されていることが『柿本人麻呂歌集』の特徴であった可能性も否定できない。さらに他の考え方も存在しよう。この点は今後の課題としたい。

以上、グループC（略体歌タイプ）の諸相を見てきた。グループA Bも含めて、『柿本人麻呂歌集』を中心に、まとめると次の通り。

一 各句の文字数、助詞、助動詞の表記のありようをデータ化し、混合正規分布によるクラスター分析を用いて分析した結果、各グループの帰属率や偏りから見て、万葉短歌の書式は、一字一音表記タイプ、非略体歌タイプ、略体歌タイプの三種に分類可能である。

二 略体歌タイプの歌々は、万葉短歌にあつて特殊なものではなく、他の二種に比べると少数派ではあるが、万葉短歌にあつて、一般的な書式である。

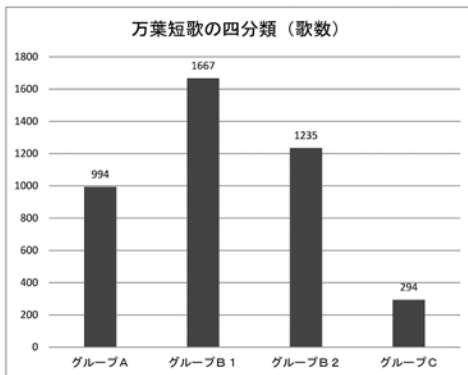
三 人麻呂歌集歌に非略体歌タイプ、略体歌タイプの二つの書式が存在することは間違いないが、その分類の内実には再検討が必要である。そして、本稿はその一つの案である。

四 人麻呂歌集歌が歌群や部立の冒頭に立つ時、その歌は巻や部立によって特徴的に分布する。ただし、その意味について

ては今後の課題としたい。

## 八 四分類

ここで、先送りにして来た四分類について触れておく。四分類の結果は以下の通り。



- グループA  
→一字一音表記タイプのグループ。
- グループB1  
→非略体歌タイプの訓字主体表記歌のグループ。
- グループB2  
→非略体歌タイプの訓字主体表記歌のグループ。
- グループC  
→略体歌タイプの訓字主体表記歌のグループ。

細かく見れば歌の出入りはあるものの、三分類のグループBが二つに分割されたといつてよい（5ページ参照）。そして、



グループB1とグループB2との大きな違いの一つに、結句の文字数がある。

帰属率一〇〇%の歌はグループB1で一七二首。グループB2で一六八首であるが、グループB1の結句の文字数は二〜三字であるのに対し、グループB2では六〜八字と大きな違いがある。これは、単に文字数だけの問題ではあるまい。結句は文末であることが多く、助動詞が多数存在していることも影響しているように思われる。さらに、

綜麻形乃 林始乃 狭野榛能 衣尔著成 目尔都久和我勢  
(1・一九)

虚蟬之 代者無常跡 知物乎 秋風寒 思努妣都流可聞  
(3・四六五)

白浪之 千重来縁流 住吉能 岸乃黄土粉 二寶比天由香  
名(6・九三二)

沫雪尔 所落開有 梅花 君之許遣者 与曾倍弓牟可聞  
(8・一六四一)

山際尔 雪者零管 然為我二 此河楊波 毛延尔家留可聞  
(10・一八四八)

のように、訓字主体表記歌巻に結句の一字一音表記が散見することも関係していよう(ここに掲げた例はいずれも、帰属率

一〇〇%のグループB2の歌である)。興味深い現象ではあるが、本稿が問題としている歌の書式とは直接しない。

万葉短歌をその書式から四分類することは、グループBを二分割することとはほぼ同意であり、グループB1とグループB2との相違は書式という面から見ても曖昧といわざるを得ない。万葉短歌の書式は、やはり三分類と把握してよいだろう。

## 九 むすび

以上、万葉短歌全体を母集団として、その書式が三種類に分類可能であること、また、それはグループA(一字一音表記タイプ)、グループB(非略体歌タイプ)、グループC(略体歌タイプ)として特徴付けられることを論じて来た。これはこれまでの研究史の積み重ねを統計的に追試験したものとについてもよい。

また、帰属率九〇%以上のグループC(略体歌タイプ)には、略体歌のほとんどが含まれ、これまでの研究史が略体歌を括り出してきたことに客観性を付与できたと考えている。しかしその一方において、このグループには非略体歌や人麻呂歌集歌以外の歌々も数多く含まれ、略体歌的な表記のありようは人麻呂

歌集歌の特徴ではなく、万葉短歌の書式の特徴として把握すべきことを述べた。その内実を考えるためには、あらためてグループC（略体歌タイプ）に属する略体歌以外の歌々を個別に検討する必要がある。しかし、そうした個別論のためには、他のテキスト（訳文を含む）や他の基準での助詞・助動詞の認定による別データでの分析結果との比較が不可欠であると考え。今は全体論の提示に留め置きたい。

注

(1) 掲げた諸説中、近代以降のものについては、単行本の発行年順に記しているので、必ずしも説の発表順にはなっていない。

(2) 阿蘇著と稲岡著とでは七首ほど認定の差異があるが、本稿で問題となった歌は含まれていない。なお、阿蘇著には分類結果の一覧がないため「七首ほど」と幅を持たせている。また、人麻呂歌集歌の範囲認定については基本的に稲岡著に従ったが、巻九については一六六七〜一六八一番歌も私人麻呂歌集歌とした。ただしこれらを除いても本稿の結論には影響しない。

(3) 歌番号の下の数字は、その歌の総文字数を示す。以下同。

(4) 底本には古典索引刊行会『万葉集電子総索引 CD-ROM版』（塙書房二〇〇九年）を用いた。

(5) 以下、巻五、十四〜十五、十七〜十八、二十を一字一音表記歌巻と記す。また、巻十九は、この二種の間隔的な存在であるため、どちらにも含めない。

(6) 以下、%表記はその一桁下の数値を四捨五入している。

(7) なお、助詞、助動詞の認定は全て古典索引刊行会『万葉集電子総索引 CD-ROM版』（塙書房二〇〇九年）に従った。

(8) 混合正規分布によるクラスター分析については中村永友氏著・金明哲氏編集『多次元データ解析法（Rで学ぶデータサイエンス2）』（共立出版二〇〇九）を参照されたい。

(9) この点は別稿に期したい。

(10) この現象について、結句を大勢で唱和するためなどと考えたこともあるが、今は現象の指摘に留める。

(11) この三種類の書式の名称は、これまでのような価値や評価を含むものではなく、名称による先入観が発生しないためにも可能な限りフラットなものが定着することを望む。また、念のために記せば、本稿で用いた名称がフラットなそれであることを主張するものでもない。そもそも実際に全く価値判断を含まない名称があるかどうか、疑問である。本稿が用い

た名称にしても、本稿の記述に沿ってAとCとしたものであるため、個人的な論の進めやすさを含み持つてしまっている。

(むらた みぎふみ／本学教授)

(かわの しゅういち／電気通信大学准教授)